２０２１年12月分総評　杉本真維子

できるだけたくさんの詩と対話をしたいと思います。

「路線図に抽象的な皇居があり／だんだん触ってみたくなってく」（青木雅）埼玉県
抽象の側からしか見えなかったものが、だんだんと具象の側からも見えてくるさま。現実とはこの両者のバランスのなかに生まれるものかもしれない。

「水道が熱く感じる数え日の／クローゼットにしまわない服」（松下誠一）東京都
水道水の熱さ、しまわない服など、日常という「クローゼット」からはみだしたものたち。その違和感を記述することで、私たちの見えない日々を掴みとろうとしている。

「フルートを／思い出すときにしかしない／くちびるのかたちがある」（加藤美紀）愛知県
ということは、フルートを思い出さない人には知りえないくちびるのかたちがある、ということだろう。ささいなことだが、違いは違いであり、人が事実だけで生きているのではないことの根拠が潜んでいる気がした。

「いちにちのねむりを少しずつほどき／まぶたを持たぬ金魚とくらす」（さいう）愛知県
「目のうらに／春が潜んでいるような、／ねむけ　灯りのひもをゆらして」（さいう）愛知県
どちらも現実的な眠気をうまく作品化させている。前者は、反-眠りとしての金魚が、眠りから解放された世界（別世界）へと私たちを誘導する。

「湯船との境界のところ／私はそこに額をつけて／かなしみについて考えている」（髙橋ちひろ）宮城県
「私」が額をつけている湯船のへりが、単なるへりを超えて、あらゆるものの境界を浮かび上がらせる。生と死、此岸と彼岸、主体と客体…。浴室という場の設定も効果的で、湯気による不透明な視界がよりリアルに境界を語っている。

「誰もが永遠に耐えかねて／絵の前を過ぎてゆく」（小山桜子）東京都
絵から視線を離すときのよそよそしい感じが以前から気になっていた。「永遠に耐えかねて」というのはそれに対する一つの回答として非常に腑に落ちるものだった。

「観覧車から街を眺める心地する／姉のつむじをひさびさにみて」（折田日々希）神奈川県
たいせつな記憶のワンシーンが「姉のつむじ」に眠っているというのは、幸福なことではないだろうか。読後に残るあたたかな感触がそう思わせる。

「雪の音かすかに聞こえる冬の夜／手袋脱いで確かめてみる」（木下美樹枝）群馬県
聴くのは耳のはずなのに、手袋を脱ぐ。全身をひらいて聴こうとする姿勢が、聴力は耳だけではないことを暴く。

「偶数のおもちゃはきっと路線図が／モノクロになる場所で生きてる」（松下誠一）東京都
偶数のおもちゃって何だろう。その言葉と主要都市から外れた場所が個人の秘密を隠しているようで惹きつけられた。

「この体の真ん中に下げた／ネクタイが／世界の全てを釣り合わせてる」（青野陽）熊本県
全然いやみのない、爽やかな自己愛とユーモアに、好感をもちました。

「大欠伸するとき胸にある花野」（さいう）愛知県
ある、あります。そういえることが、私にとって、生の指標となる気がした。秀逸な一作。

「耳たぶを揉めば／たしかに生きている／
わたしの脈のすこやかな伸び」（さいう）愛知県
この作品も生の実感へと読者をいざなう。誰もが知っている耳たぶの柔らかさにそのきっかけをおいているところも秀逸。

今月はとりわけさいうさんが健闘しました。一作一作、言葉をしっかりと磨き上げています。
次回もたくさんの方の投稿をお待ちしています。